

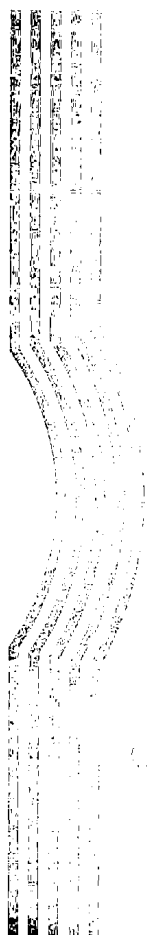
曾野綾子
愛の証明



愛の証明

曽野綾子作品選集

光風社出版



曾野綾子作品選集 5

愛の証明

昭和六十一年七月五日 印刷
昭和六十一年七月十日 発行

定価 一二〇〇円

著者 曾野綾子

発行者 深見兵吉

発行所 光風社出版

東京都文京区関口一三十二四

郵便番号一一二

電話番号〇三(二〇四)二四四一

振替東京八一二九一三

印刷 大盛印

製本 越後堂製本

◎ 乱丁、落丁の場合はお取り替えます

曾野綾子作品選集

愛の証明・目次

都会の一隅で	7
佳人薄命	19
隣家の犬	54
集中豪雨	72
風のあがる風景	85
星形	101
愛の証明	115
男の墓	138

あたたかい海

遺児

遊動円木

檻の中

真珠ホテル

菊薫る

ゆりのき

解説 鶴羽伸子

265

245

229

215

203

179

163

147

装幀 玉井ヒロテル

曾野綾子作品選集

愛の証明

都会の一隅で

東京タワーにのぼった外国人は、三六〇度にひろがる淡い埃色の東京の風景に、多かれ少なかれ落たんするのであった。

「ベイルートを思い出すね」

とたまたま上って来た一人が言った。はるかかなたのセビヤ色にかすむぼやけた夕景の中に、乾いた墓石のように西洋式の高層建築が並んでいるからであった。

しかしそれは思いつきであって、目の前のパステル調のパノラマは、東京以外のどこの町でもあり得なかった。ヨーロッパでもなく、西欧人の考える東洋の香気などもありはしなかった。

「しかし大都会だ」

とその連れが言った。大都会だ、というのは、おびただしい人間の集合をひしひしと感じさせるといっただけで、別

に賞讃の意味あいではなかった。

期待しなければすべてよし、と言ったのは誰だろう。と彼は思い出そうとしていた。

先の男はもう少し宗教的であった。人を見るには角度と距離が大切だ。できうることなら、同じ地面に立って、相手の肩に手をおくことができるような場所でない、と、本当に日本人を理解することなんかできない。

そうだ、望遠鏡をのぞいてみよう。

彼はポケットから硬貨を探し出して大きな備えつけの望遠鏡の穴に入れた。最初は角度が低すぎたらしく、何が何だかよくわからなかった。気がつく、と、タワーの窓枠に焦点をあてているらしかった。

今度は思い切って、遠くにねらいをつけた。ビルの裏窓がいくつも見えた。一人の会社員らしい男が南京豆か、ポップコーンらしきものを食べていた。自動車の修理工場では二年前のアメリカ車のエンジンを大切そうに洗っており、ガラス屋はガラスを自転車の荷台に器用に積みこんでいた。

こうしてかりに望遠鏡で距離をちぢめてみたところで、いっこうに日本を感じさせる風景にはお目にかかれなかった。もうやめてしまおうか、と思ひながら、彼は徐々に望遠鏡の角度を変えて行つて、タワーのすぐ足許ともいえる

地点まで来ると、急に動かなくなつた。

そこに、彼の期待していた一枚の生きた絵があつた。

古い、日本風の邸であつた。庭には木がこんもりとおいしげつていた。

僅かに残つた地面にも芝生のためにいいような陽あたりなどは考慮されていなかった。下草が生いしげり、花らしいものは全く見えない。只一本だけ夕陽に血のように映えた紅葉があり、その下に池があつた。池の周囲の土が、しかし、英語でいう「苔の緑色」をしていたが、それを踏んで滑る必要はなさそうだった。とび石づたいに、その池の端へでられるようになっていたことが一見してわかつたからである。家は二階屋ではなかつた。傘を低くさした人間のような、黒い瓦屋根とひさしの深い建物が顔をそむけるようにこちらに背を見せてL字型にのびていた。

だから、そのひさしの蔭からひとりの女の姿が現われた時の感動も又ひとしおだった。

しかし——その時、望遠鏡はかちやり、と音をたてて、無惨にもシャッターを下ろしてしまつた。男は小さな舌うちをすると、もう一枚、ズボンのポケットから硬貨を出して穴におしこんだ。数秒もかからない動作だった。

女はすでに、ひさしからはなれて、池の端まで来ていた。女は白地に藍のあざやかな着物を着ていた。よくみる

と決して若くはない女だったので、彼はぎっくりした。彼女は今、タワゝの方に向つて立つていた。その少しばかり白くなりかかつた髪が、乱れて両頬に落ちてゐるのまよよくわかつた。髪は風にかすかにゆれてゐた。それにつれて紅葉の枝も揺れた。紅い色が散るように映えてその顔にさした。年の頃は五十五、六歳という感じがしたが、日本人の年齢には確信をもてなかつた。

やがて彼女は池のほとりにしやがみこんだ。子供が蟻か何かを見つけた時の動作に似ていた。しかし彼女は何かをみているとは思えなかつた。顔は半ばあげたままだし、手もださなかつた。彼女は只、時間のすぎて行くのを呆然と見送つてゐるか、或いは何かに耐えているように見えた。肉体的なものか、精神的なものか、それはわからない。

しかし少なくとも、もしも彼女が腹痛に悩んでゐるとしたら、いつまでもそうして庭の一隅にじつとしてゐるといふことは考えられなかつた。それにやがて彼女は奇妙な動作をした。それが泣いてゐるのだということが理解できるまでには、少し時間がかかつた。眼の位置にまであげられた彼女の袖のかげで表情がよくは見えなかつたからだったが、それがつまり涙をふいてゐるのだという事が次第にわかつてきたのである。

男にとつて、日本へ来てから、子供以外の人間が泣いて

いるのを見たのはそれが最初だったので、彼は小さな興奮を覚えた。彼はそれから、望遠鏡を少しずらして、もう少し明確にその家の全貌をとらえようとした。

羽目板にもわずかに緑色のかげがさしている。それは決して人工的な塗料でなく、陽あたりの悪いその壁面に、やはり苔のような植物がわずかに生えているかららしい。

しかし、何といつてもその家の一番の目印は、古めかしい門の脇に軒をはるかに高くこえた一本の大樹が、鳥をとまらせたように、点々とその枝に乳白色のみことな花を咲かせていることだった。

「見たまえ！ あそこ日本がある」

彼は望遠鏡から目を離して、同行の友人を呼んだ。

「そうか」

「見ればわかる」

しかしその時、望遠鏡はがちと小さく事務的な音をたてて時間が切れたことを告げた。

その夜は満月であった。男は夜になってから、もう一度、昼間の光景を思い出した。

「あの家の前へ行ってみよう」

彼は夕飯の時たまたま同席していた日本人の通訳の青年に言った。

「どこの家ですか」

「昼間、望遠鏡から見えた家さ」

彼は手帳をとり出して、大体の位置を書き始めた。

「ここに広い通りがある」彼は言った。

「市内電車の通っている道だ。ここにソ連の大使館がある。そのそばを入った、この辺だ」

通訳の男はちよつと笑った。

「日本のビート族の集まるところですよ、このあたりなら」

「ビートとは関係ない」

男は少しばかり、不愉快そうな声を出した。

タクシーを下りてから男と通訳の青年は暗くて内部の様子をのぞきにくい家ばかり並んだ住宅地の中をこつこつと歩き始めた。もつとも、道そのものは散歩をたのしむのに充分なほど静かとは言えなかった。大通りをさけた自動車が行った砂埃が、反対側から来た別の一台の前照燈の光によってもうもうと照らし出されるといったあんばいだった。

車と車との間の、短いインターバルに月の光が沈むように道にさして来た。

「こんなに暗くなってから、わかるかなあ」

通訳の青年は心もとなげに、そしてできうることなら、この大して意味があるとも思えない仕事から解放されるこ

とを願っているように言った。

「わかる。大きな白い花の咲いている木があった。それにこの月あかりなら、大ていのものは発見できる」

相手は、今自分のいるところが、都会の真直中ではなく、戦いの前線にでもあるような口吻だった。

二人はなおも細い横丁を歩き廻った。

空襲にもやけ残ったらしい古い家の玄関が開け放されて、そこに数人の男たちがたむろしている様子が、あかい電燈の光で見えた。このうちからは螢光燈らしい、青い冷い光はどこからも洩れていなかった。その代り、あかく人肌にあたたかみを思わせるようなぼんやりした光だけが、その古びた家の隅々にまでもこもっているようにみえた。

男たちのうちの一人が銀色に光る植物の葉のような造花をもって玄関を入ろうとしている姿を見ると、外国人の男は通訳の青年に尋ねた。

「あれは何だね」

「蓮の花ですよ。葬式に使うんです。誰か死んだんですね」

「何か匂いをする」

「まさか」

青年は死臭を連想したらしく、めっそももない、という調子でうち消したが、すぐに思いついて、

「線香の匂いですか？」と尋ねた。

「いや、花の匂いだ」

男は言いながら、上を向いた。月の光を浴びて、両掌をひろげたほどに大きい、白い花が、まろやかにみずみずしい夜空に浮いていた。

「泰山木ですね」青年は言った。

「この家だ！ まちがいはない」

男は言った。古い表札には「佐々」とあった。

「しのさんは？」

「今あちらのおへやお床をのべてむりに休んで頂きましたの。これで三日、ほとんど眠っていらっしやらないから」

「眠れはしないだろうけどねえ」

「今、蚊やりをおもちしましたら、ありがとう、とおっしゃって……」

「あかりは？」

「消して頂戴とおっしゃったものですから」

「つまづきやせんのか？」

「いい月あかりですわ、今日は」

「葬儀屋さん？」

「今しがた帰りました」

「お寺さまは、おそいねえ」

この家の親戚の人らしい老女と若い娘の会話がひそひそ

と聞える中で四人の男たちが、祭壇のおいてある次の間の暗い縁側に腰をおろしていた。祭壇の近くにいと、やはりつましく正坐していなければならぬから、逃れて来たという感じがなくなかった。そのうちの一人はYシャツの腕まくりをし、ネクタイもなしでしかもはだしだった。他の三人も似たりよったりで、ふだん着のままかけつけて来たという恰好をしていた。坐り方も、決して慎しみ深いものではなかった。いつも来っている友だちの家の縁側で、月見をしている、という感じでしかなかった。第一、確かにここの方が涼しかった。

「あなたは、佐々の学校の方ですか」

中の一人が、一人だけとびぬけて若い青年に尋ねた。彼らは、親戚ではないということでもどちらからともなく誘いあって、そこにかたまっているらしかった。

「はあ、L大で佐々先生と同じ、仏文科の研究室の、助手をしている浅尾と申します」彼はちよつと改つて挨拶した。

「我々はみんな高等学校から大学まで佐々と一緒だったものでしてね。こちらが新聞社の外信部にいる太刀川、これが翻訳屋の堤、僕は民放にいるんですが尾根というんです」堤というのがはだしの男で尾根自身は地味なアロハだった。太刀川がネクタイをつけて一番まともな服をきていた。「皆さん、グループでいられたんですか」

「五人組でね、もう一人、目下失業中の宮下というのが、来るはずなんだが……。そしたら、太刀川と僕は仕事に戻ります」尾根が言った。

「宮下は酒の匂いがしてほんと、来んやろう」

太刀川は、いくらか言葉に閑西なまりがあった。

「一番できるのが、やっぱり一番早く死んだな」堤が言った。

「何だ、それはお世辞か。しかし佐々の奴、あんなところに飾られてさだめし恥かしがつとるだろう」

太刀川はちらりと、用意のとなつた祭壇の方を見ながら言った。堤は低い笑い声をたてた。だれもまだ一人の友人の死を実感として感じていないようにみえた。

その祭壇の上に、黒枠に入つて飾られている佐々景行は、今年三十四歳であった。彼は私立のL大の仏文科の講師であり、過去八年間にわたつて結核だった。

最初に肺切除の手術をしたのは都下の清瀬というところである。冬の寒さの厳しい療養所で彼は一年半の年月を送つた。二年前再発して又、一年をL大の附属病院で送つた。病室からみると空がいつもセピア色に薄汚れているような東京のご真中であつた。

しかし直接の死因は、虫歯から誘発された敗血症だった。「学校を何日か休んだんですか」尾根が浅尾に尋ねた。

「いつも週二日だけしかみえないんです。ですから休みといつても当然だし、齒のことはきいていませんでした。たった三日わずらっただけだときいた時は信じられませんでした」助手は言った。

「尾瀬沼かどこかを旅行していて、それでつい医者にみせるのがおくれたってきいたぞ」

「親知らずだろうな。僕も時々、梅雨時になるとわるくなる」堤が頬をおさえながら呟いた。

「あいつが死ぬのは自業自得だな。しかしお母さんを一人残して死んだのはいかん。やつぱりアホや」

太刀川が言うと沈黙があたり流れた。

「齒は抜かれたんだそうですね」

浅尾は思い出したように言った。

「抜歯して、その後ですぐ尾瀬へ行かれたんじゃないやありませんか」

「汚い手でいじったんだろうな」堤は言った。

「いや、あいつは汚い手なんかでいじらないよ」

尾根が反対意見を出した。

「あいつは金をいじった後は、いちいち手を洗うくらいだからね」

「自分が結核のくせして、しぶとい奴や」太刀川が言った。

「自分のものは汚くないよ、誰だってそうだ」

尾根は言い張った。

「佐々とね、一緒に電車に乗ってみろ。おもしろいぞ。あいつのつり革のつかまり方がさ」尾根が言った。

「どんなつかまり方してたっけ？」

「人差指一本を鉤型に曲げてさ。つまりできるだけ手を汚すまい、というやり方さ」

「その癖、敗血症か。皮肉なものだな」

堤は力ない言い方をした。

「しかし、あいつのいいところは、それが嫌味に感じられないとこだな」太刀川は感にたえたような語調で言った。

「佐々ぐらい不器用な奴は、そんなにいいもの。自転車にはのれない、泳ぎはできない」

「しかし馬をやっただろう」

「馬は四つ脚だからね。自転車とは違う」堤はけなした。

「しかし佐々は女にもてただろうな。何となく貴公子然としたところがあるし、それに肺病だからね。女の母性本能をかきたてられるだろうなあ」

「いつも、いい服を着とったじゃないか。おやじのお古だという話だったけど、それが又、実にほれられするような生地なんだ。しかし襟のところがすり切れててさ」

「そのすり切れたのを、母君がきれいに^{はぎすみ}つくろってある。僕の妹が、実に奥床しい感じだと言って感服してた」

尾根が言うと、「そりや、君よりは奥床しいだろうがね」と太刀川はやじった。

「さつき、しのさん、とか呼ばれていらしたのが、お母さんですか」助手の浅尾が尋ねた。

「そうでしょう。そういう名前だったと思います」

尾根が言った。

「おい、くつでしようか」

「もう五十七だと思ふんです。うちのおふくろと同年だったから」尾根も同じ思いらしくすらすらと答えた。

「ひとり息子だからなあ……死ぬなんてアホや」

太刀川が又言った。

「お父さんもおられないんでしたね」

「佐々のおやじはね、佐々景英かげひでといってS銀行の頭取だったんですよ。戦争中、焼夷弾の直撃を受けて亡くなったんです」太刀川が説明した。

「実はつかぬことをうかがいますが、佐々先生は、本当に独身でしたか」浅尾が尋ねた。

「まず、かくし女がいたということはきかないね」尾根が煙草の火をつけたが言った。

「ない、ない。それはない。体がわるかったからな。プラトニック・ラブは知らんけど」太刀川も保証した。

「婚約されてた、ということもありませんか」

「きかないね。堤はどうかい」

「僕も知らない」

「どうして？ 何かあるんですか」

尾根が不審そうに言うと浅尾は答えた。

「実は、僕、佐々先生が、デパートで結納包を買うところを目撃したことがあるんです」

それは、佐々が、二度目の病院生活に入る直前のことである。浅尾が佐々景行の姿を見たのは日本橋のデパートの一階のエレベーターのそばであった。浅尾はすぐ声をかけようと思ひながら、多少の悪戯あくごつ気があったので、尾行するように佐々のあとをみえがくれについて行った。

佐々は男物のかみそりや旅行用の化粧品売場の硝子ケースなどを見るときも覗きこみ、やがて、がらんとした一隅に結納の道具一式が置いてあるところまで来た。

佐々は、浅尾の観察によると、それまでの情性でついそこを覗きこみ、女店員に自分がそれを買いたい来たと思われたと気がつくとかあわてて歩き去った。当然のことに思えて浅尾はむしろおかしかった。佐々ならずとも、自分でもそうするに違ひない。しかし驚いたことに、佐々は五、六歩通りすぎてから、又後もどりにして、幾分照れくさそうに、結納の道具一式を買ったのである。

「五、六歩ゆきすぎてから、戻ったというところがポイント

だな」探偵小説の翻訳もしている堤が言った。

「僕もそう思います」浅尾は言った。

「友達に頼まれたんだ。あれを買うのはてれくさいからな」

「推理小説の鍵としては月並みだね」尾根が言った。

「結納についてったあの扇子がほしかったのと違うかな」

太刀川が新説を出した。

「ばかな、扇子はほしくて、あの白木の台はどうする」

沈黙があった。庭は流れるような虫の音でみちていた。

「佐々先生がもう少しぼろな人だったら、僕は問いつめて白状させることもできたんですけど、いつもあまり真面目な方で、その結納事件以来、いつ迄まっても、別に結婚されるという話でもないところを見ると、いよいよ、きき出しにくくなりましたね」浅尾は言った。

「そりゃ、そうだな。そういう話は冗談にしそこねるとえらいことになるからな」尾根は同情してくれた挙句、

「しかしそれは、僕が露店で下らないものを買う趣味と同じなんじゃないかな。大工道具とか、新しい接着剤とかさ。何に使うということもないけどうちへ帰ってからゆつくりたのしむという……」

と言ったが、その時、祭壇の方にざわざわと人の集まる気配がして、チーンと鉦の音も聞えて来た。

「お経が始るらしいな」尾根は気がついた。

「ここできいていけばいいだろう」

堤は煙草の火さえ消そうとしないままに言った。

「僕は便所」太刀川は立ち上った。それにつられて浅尾も席を立った。二人は客間の祭壇の前に集まろうとしている人々をさけてまわり縁から玄関にでた。便所はそこから内廊下を少し入ったところにあるらしかった。

「佐々さん速達！」二人がちやうど玄関を通りかかった時、郵便配達が、一通の封書をもって来た。

「はい、御苦労さん」太刀川は受けとり、何気なく、その宛名を見てから、びっくりしたような声を出した。

「仏さんあてだ」

浅尾も覗きこんだ。白い封筒は確かに、佐々景行あてになつており、差出人は「小口みさを」とあった。

「これは誰にみせますかね。やっぱりおふくろさんだろうな。僕わたして来ますよ」

浅尾は自分だけ先に便所に入り、もとの縁側の席にもどつた。読経は始つていた。浅尾は、佐々先生にひそかに想いをよせているという風評のあった仏文科の女子学生の名を過去何年かにかわつて思い出そうとした。しかし「小口みさを」には心あたりがなかった。

「それにしても、宮下はおそいな」尾根は気にしていた。